

幼児期における自閉性症状に及ぼす母子支援の有効性

－愛着形成と母子分離のプロセスからの検証－

尾崎 康子

(2005年8月11日受理)

Efficacy of Support Which Establishes Attachment for Mother and Autistic Infant

Yasuko OZAKI

要 旨

本研究では、2歳時に「自閉症の疑い」と診断されたA児とその母親に対して行った母子支援の事例を取りあげた。A児に対しては、2歳9ヵ月から週1回1年間に亘って幼児教室において発達援助を行うとともに、並行して、母親へのカウンセリングを実施し、母子間に愛着が形成されることを目指した心理的援助を行った。その結果、母親に対する愛着行動の成立過程が示され、そして、3歳6ヵ月時には「自閉症とは言えず、経過観察が必要」とされた。また、母子分離の状態を1年間測定したところ、母子分離の推移は愛着形成の経過に対応していることが分った。このA児の事例を通して、幼児期の自閉性症状を軽減するための母子支援の有効性を愛着形成と母子分離のプロセスを調べることによって検証した。

キーワード：幼児期、自閉症、母子支援、愛着形成、母子分離

Keywords：infancy, autism, support for mother and infant, attachment, maternal separation

問題と目的

自閉症の本態・成因・治療に関する学説は、Kanner (1943) による報告から今日までめまぐるしく変遷してきたが、現在では、自閉症は多様な生物学的障害要因が関与した広汎性発達障害であるとの見解が主流となり、診断もDSM-IVやICD-10によって統一されてきた。しかし、自閉症の診断が確定するのは4歳前後であり、それ以前の幼児期前半における自閉症の発達状況は十分に解明されておらず、また適切な治療や療育も確立されていない。しかし、自閉症状の固定化や典型化を待つまでもなく、できるだけ早期に自閉症の初期徴候を発見して早期に対応するならば、自閉性の発達障害を改善することができることが指摘されており (Levy, 1983)、幼児期前半の自閉性の発達メカニズムを解明し、治療や療育方法を究明することは、自閉症研究への大きな貢献となる可能性を秘めている。

一方で、1990年代には乳幼児精神医学の台頭により、乳幼児の母子相互作用についての実証的な研究が盛んに行われるようになり、乳幼児が母親との間主観的な相互作用の中で愛着を形成し、社会情緒的行動を発達させていく状況が明らかにされてきた。特に、Stern (1985) の自己感の発達過程は、自閉症の症状形成と発達障害を

解明する重大な手がかりと考えられ、発達過程において間主観的な関係性を言及することが、自閉症を発達的に理解する新しい視野を提供すると考えられるようになった。そして、山上 (1999) や小林 (2000) は、自閉症が「関係性」に絡む特異な発達障害と捉えて幼児自閉症の治療を行っている。本研究も基本的にはこの立場に立脚したものであり、自閉性症状が、乳幼児期における相互作用の不全から「関係性」の障害を呈している状態と捉えて、母子の愛着関係が形成される心理療法的アプローチを行った。

一方、尾崎 (1999) は、幼児の母子分離の実態を明らかにしたが、河村・尾崎 (1999) は、それらの母子分離の状態が幼児の母親への愛着関係を反映していることを事例研究によって示した。さらに、母子分離と愛着との関係は、統計的にも実証されている (尾崎, 2003)。従って、自閉性症状を持つ幼児の愛着形成過程を検討する際にも、母子分離の推移を調べることで、愛着形成をより的確に捉えることが可能となると思われる。

本研究の事例は、2歳時に「自閉症の疑い」と診断されたA児とその母親に対して行った1年間の母子支援について記したものである。母子の愛着関係が形成される心理療法的アプローチを行い、愛着と母子分離のプロセスを検討することにより、愛着行動の形成がA児の自閉

的行動の軽減と如何なる関係を持つかについて検証することが本研究の目的である。

方 法

1. 対象児の概要

1) 家族構成

父親，母親，A児（2歳9ヵ月の女兒）の3人家族である。

2) 生育歴

満期正常分娩で生まれ，胎生期及び周産期に特に異常は認められなかった。運動発達は定額3ヵ月，匍匐8ヵ月と順調に進んでいたが，歩き始めが15ヵ月と少し遅めであった。しかし，歩けるようになると，周りの状況に注意を向けず自分勝手に動き回るため，母親は事故が起こらないようにと必死でA児の後を追いかけることが常であった。初語は10ヵ月で「ママ」「パパ」と言うなど大変早かったが，その後2歳まで幾つかの単語を話せるだけで言葉は増えなかった。その単語も一方的に言うに留まり，母親の問いかけにも応答しなかった。また，人見知りや後追いをすることがなく，母親がいなくても一人で遊び続ける子どもであり，愛着行動が大変乏しかった。

3) 診断と療育歴

2歳時に，保健所の精神科医により「自閉症の疑い」と診断される。その後，障害児の療育に通うように勧められるが，母親は，本研究の母子支援を行う親子教室に通うことを選択した。親子教室には，A児が2歳9ヵ月時から3歳8ヵ月時まで通った。教室修了2ヵ月前の3歳半の時には，「自閉症の診断名の同定はできず，経過観察が必要」と診断されるに至った。

4) 入所時の心理アセスメント

親子教室の入所時に，A児（2歳9ヵ月）の行動観察を行うとともに，社会生活能力検査などの心理テストを行い，A児の発達状況を把握した。また，親子関係を調べるために親子関係検査を実施した。

① 行動観察

A児は，他の子よりも早く走れるくらいに動きは俊敏で，運動発達には特に問題がなかったが，つま先立ちで歩いたり走ったりするなどの特徴が見られた。時折，手をヒラヒラさせており，また，手にはいつも棒を握っているが，それがなくなると探し回ってパニック状態になった。言語発達は，単語中心で2語文もまだ話せなかった。人から話しかけられても，それに応答することがないばかりか，注意さえも向けないため，人とのコミュニケーションが大変難しい状態であった。他の子どもが遊んでいても，周りの状況に注意を向けずに自分勝手に動き回っている。他の子が近くにいると，他の子を押しのけたり，ぶつかったりする。また，母親がA児の側を離

れて見えなくなっても，それに気が付かないで遊び続けており，母親を求めたり探し回ったりすることがなかった。母親がA児に無理に違うことをさせようとしても，泣いたりのけぞったりして嫌がった。

②社会生活能力検査（旭学園教育研究所・日本心理適正研究所，1980 日本文化科学社）

A児が2歳9ヵ月の時に，母親に検査の記入を依頼した。その結果，社会生活年齢は，1歳9ヵ月であり，社会生活指数は60であった。また，下位項目の社会生活年齢は，身辺自立が1歳8ヵ月，作業が1歳9ヵ月，意志交換が2歳0ヵ月，集団参加が1歳10ヵ月，自己統制が1歳0ヵ月であった。何れの下位項目の社会生活年齢も生活年齢よりも低かったが，特に自己統制が低いことが特徴的であった。

③子どもの行動の調査—3～7歳児用（McDevitt, S.C. & Carey, W.B. 1975 Behavioral Style Questionnaire）

A児が3歳の時に，母親に調査の記入を依頼した。点数をZ得点に換算したところ，過活動性は57.2，不規則性は42.0，新奇場面にしり込みは68.0，非順応性は50.5，反応の強さは38.8，気分の質（機嫌の悪さ）は32.5，非執着性（長続きしない）は70.8，過敏性は26.5であった。新規場面にしり込みし，物事に執着しない気質が顕著であり，また物事に敏感に反応しない状態が目立った。

④TK式 幼児用親子関係検査（品川不二郎・品川孝子 1992 田研出版）

A児が3歳の時に，母親に検査の記入を依頼した。各養育態度の点数のZ得点は，不満が57.2，非難が39.7，厳格が58.5，期待が71.6，干渉が77.0，心配が52.2，溺愛が61.4，盲従が50.3であった。期待を高く持つ支配的な養育態度と過干渉的な養育態度の得点が大変高かった。

5) 母子分離と愛着の評定

1年間のA児とその母親に対する心理的援助の経過において，愛着Qソート法と母子分離の評定を行った。

①母子分離の評定

幼児教室での2時間の保育中に，母親から完全に離れて幼児教室に参加した場合，途中から誘導されて参加した場合や途中で母親の元に戻った場合，終始母親の側にいた場合の何れかであるかを，8名の保育者が保育終了後に合議して評定した。この評定は，夏休みの1ヵ月間を除く11ヵ月間に計28回行った。

②愛着Qソート法（42項目版）

愛着Qソート法（42項目版）は，Waters & Deane（1985）の Attachment Q-sort の100項目を近藤（1997）が42項目に簡易化したものである。愛着Qソート法（42項目版）の評定は，教室終了後のA児の母親に対する反応や行動特徴などの観察をもとに

行った。実際には、カードに書かれた項目内容に対して、A児の行動特徴が「1：最も表さない」「2：やや表さない」「3：少し表さない」「4：どちらでもない」「5：少し表す」「6：やや表す」「7：最も表す」の7段階の何れであるかを判断し、最終的に全42枚のカードを7段階に6枚ずつ割り当てる。その割り当てた段階がその項目の配点となる。そして、愛着安定性の得点は、それらの行動を最も典型的に示した場合の標準分類（criterion sort）配点（Waters, Vaughn, Posada, & Kondo-Ikemura, 1995）とA児の項目配点の相関を求め、それにFisher r-to-z変換を施して算出した。

2. 実施機関の概要

実施機関は、2,3歳児とその母親（1日40組）が週1回1年間通所する親子教室である。子どもは幼児教室で自由遊び中心の保育を受け、母親は母親教室で子育てを学んでいる。施設自体が親子を暖かく受容する「場」として機能するための人的物的環境の配慮を行っている。特に、子育て不安や困難が多くみられる現代社会において、子どもをholdingする母親が最もholdingされる必要があるという職員間のコンセンサスの元に母子への支援を行っている。また、希望者には、筆者（以下、カウンセラー）が母親との個別相談を行い、保育者が子どもへの個別対応を行った。A児親子の場合には、教室活動に加えて、母親に対して概ね月1,2回の個別相談を行い、一方、A児に対しては、教室後半からは保育者Bが専任で週1回の個別対応を行った。

結果と考察

1. 母子分離の1年間の推移（図1）

幼児教室の2時間の保育中に、幼児教室にだけいた場合、隣接する母親教室と行き来した場合、母親教室だけ

にいた場合を教室日ごとに28回評定したところ、親子教室に入所した当初は、#2を除いて#1から#7まで幼児教室だけで過ごし、母親と完全に分離していたが、#8になると急に母親教室で母親の側にいるようになり、#10と#11も母親教室で母子不分離の状態であった。#12から#18までは、幼児教室で遊ぶようになるものの、保育中に母親教室に戻ることも多かった。しかし、#19から最終の#28までは、母子分離して幼児教室だけで遊ぶことが続いた。従って、親子教室における1年間の母子分離の推移は、最初は母子分離であったが、途中で母子不分離になり、その後分離と不分離を繰り返しながら、最後には再び母子分離の状態になった。

2. 愛着Qソート法における愛着安定性係数

親子教室に入所してから6ヵ月後の#16の教室終了後に1度目の愛着Qソート法を実施したところ、愛着安定性係数は、0.353であった。さらに、その4ヵ月後の#25の教室終了後に、2度目の愛着Qソート法を実施したところ、愛着安定性係数は0.616であり、1回目よりも愛着安定性が高くなった。なお、A児の年齢は、1回目3歳3ヵ月、2回目3歳7ヵ月であった。

3. 1年間のA児の成長過程と母子関係の変化

親子教室でのA児の行動と母子関係の様子について、1年間28回の教室での様子を7期に分けて以下記述する。また、母子分離と愛着形成について、A児と母親の実際の言動からも検証していく。

第Ⅰ期 母親に一方的な要求をするが、母親への愛着行動が乏しい時期（#1～#3 X年10月～11月）

1) 教室でのA児の様子

#1の幼児教室では、何かに集中して遊ぶこともなく、自分の興味中心に動いていた。他の子どもが大勢いても、それを嫌がったり避ける様子はなく、子ども

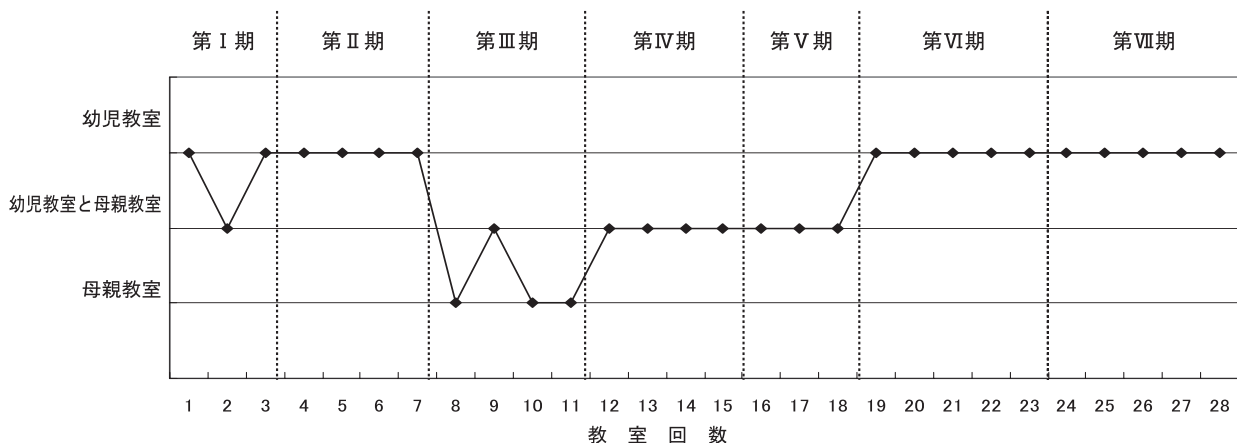


図1 A男の母子分離における1年間の推移

注）縦軸は、A児が保育中にいた場所である。「母親教室」は、母親の側にいるので母子不分離を表し、「幼児教室」は母子分離を表している。「幼児教室と母親教室」は保育中に両教室を行き来したことを表している。

に無関心のように見えた。親子で集まる際に、母親がA児と一緒に来るように促すが、ついてこないため、手首を掴んで引っ張って連れて行こうとしていた。しかし、それでも途中でしゃがみこんで動かなくなったため、A児を抱えて皆のところまで連れてきた。母親の表情は大変が硬く、一方、A児は無表情であった。

#2では、保育者と子ども達が遊んでいる様子にA児が関心を向けることなく、積木やミニカーなどを手に持ってフラフラと園庭を動いていた。保育者に声をかけられても、A児は保育者と視線を合わすこともなかった。おやつの時間になると、友達の分や落ちているものも食べてしまい、それに対して悪びれた様子もなく、また、スリッパをなめようとするものもあった。保育中に母親を気にすることは全くなかった。

このように第Ⅰ期では、A児の行動には自閉的な症状が典型的に認められた。

2) 個別相談での母親の様子

#3教室における個別相談では、母親は、発達の遅れを心配していることをカウンセラーに話した。そこで、幼児教室においてA児の様子をよく把握すること、A児の問題への心理的援助を行っていくことを母親に話した。しかし、「自閉症の疑い」を2歳前に診断されたことについてはこの時点で母親がカウンセラーに話さなかったため、発達ガイダンスはせず様子を見ることになった。相談中、母親の表情は硬かった。また、同席しているA児は母親の背中で「あーあー」と声を出したり、母親の髪の毛をぐしゃぐしゃにしているが、母はそれを咎めるわけでもなく、また温かく抱きかかえるわけでもなかった。A児がするままに、されるままにしていた。

3) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅰ期の母子分離の状況は、基本的には幼児教室において母子分離していた(図1)。しかし、#3では、教室中に母親教室の母親の元に戻ることが初めて見られたが、それはおにぎりを要求するためであり、母親に安心を求めるものではなかった。このように母親に対しても要求がある時にだけ関係を求め、それ以外は関係がとれない状態であった。

第Ⅱ期 母親とA児が親子教室の「場」の雰囲気を感じていく時期(#4~#7 X年11月~12月)

1) 教室でのA児の様子

#4と#5の幼児教室では、相変わらずフラフラと自分勝手に動き回り、施設の外に出てしまうものもあった。そのようなA児に対して、保育者が「Aちゃん」と言って近づいたり、A児が走る後をついていくと、怯えたような表情で逃げていった。一方、子どもに対しては余り警戒心がなく、大グループの中にもいることもあるが、遊びの内容や子どもとの関わりが理解できず、砂場で他の子が使っているものを気にせず使って

自分中心に遊んでいた。

#6になると、鼻水をすすりながら不安そうに保育者に寄ってきて、自分の上着を指差して着せてもらうことを要求することがあった。

第Ⅱ期では、相変わらず保育者が積極的に関わりを持とうすると怯えてしまうが、自分から保育者に一方的な要求をすることができるようになり、親子教室における受容する「場」の雰囲気を感じて防衛が軽減したものと考えられる。

2) 個別相談での母親の様子

#4教室における個別相談では、母親が「A児の言葉が2語文になっていないためか、友達とうまく遊べず、こちらの言うことも半分位しか理解できていないような気がする。声をかけても知らないふりをする時もあり、することも遅れているようなのでとても心配している。また、1歳半健診の時に発達の遅れを指摘され、大変ショックを受けた。それ以来心配してきた。」と話した。母親はA児の育ちについて如何に不安を持っているかをカウンセラーに話すようになった。母親が自分の心情を話してくれたことから、カウンセラーと母親との信頼関係が築かれ始めたことを感じ、これ以後A児との母子関係について深く介入していくことにした。まず、乳幼児期の母子関係の重要性を説明した上で、これから安定した母子関係を築いていくことが何よりも大切であることを話した。母親は「今まで、A児を友達の中で遊ばせることばかり考えてきたが、これからは母子関係を大事にしていくようにする」と、何かを決意したような感じで答えた。

3) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅱ期では、さらに明確な母子分離の状態が続いた(図1)。教室中に一度も母親の元に戻らないばかりか、施設の外にも飛び出していった。教室終了後に母親と再会してもほとんど表情を変えることがなく、愛着行動をとることもなかった。しかし、母親は、これからA児との関係を調整していく決意をする。

第Ⅲ期 母親がA児を可愛いと思い始め、A児も母親への甘えが出てきた時期

(#8~#11 X年12月~X+1年1月)

1) 教室でのA児の様子

#8と#9では、A児は母親教室の母の側にいて、母親が移動すると自分も後を追うようになり、それ以前の明確な母子分離状態に比べると、A児の行動に大きな変化が現れた。

#10では、A児が母親の側にいるので、保育者は母の横でA児とボール遊びをするように働きかけた。保育者がA児にボールを投げてもなかなか返してくれなかったが、母親が「Aちゃん、先生に投げて」と言うと、保育者に上手に投げ返してくれた。その後は、母親と一緒に型はめパズルを上手にしていた。また、帰

りには、母親に促されて、保育者に初めて「バイバイ」と言うことができた。

#11では、相変わらずフラフラしたり、画用紙の束をひらひらさせたり、手をぐるぐる回す行動はみられたが、ひとしきりそのような行動をした後、保育中に母親の膝の上で眠ってしまうことがあった。また、保育者が、名前を呼んでも振り向かない、近寄っていくと逃げていくことは変わらないものの、保育者が部屋を出て行くとき後をついてきたり、戻ると嬉しそうに近寄ってくるなど保育者の動きを気にしている様子が見られた。

第Ⅰ期やⅡ期でA児が母親や保育者の動向に全く関心を示していなかったのに対して、第Ⅲ期では、母親の指示が少し通るようになり、母親への後追いという愛着行動が芽生えるという変化が見られた。また、保育者に対しても少し関心を寄せるようになり、A児の対人関係が少しずつ変化していることが伺えた。

2) 個別相談での母親の様子

#9教室における個別相談では、「単語は少しでているが、要求は態度で示す。アニメのビデオが好きで、毎日2時間見ている。ビデオを消すと『キーキー』と激しく怒るので仕方なく見せている。また、どこに出かける時にも棒を握って離さないで大変困っている。」と発達の遅れとこだわり行動が心配であることを訴えた。カウンセラーは、母親がA児の発達状況を客観的に捉えることが可能であると判断し、乳幼児期における母子関係の重要性を説明した上で、「今、A児が母親を求め始めていることは、大変素晴らしい成長であること、A児が母親に甘えられる関係を大切にすること」を話した。母親は「今まではどこに行くか分からないところがあったが、最近母親を随分気にするようになってきたのでA児なりの進歩をしていると感じている」としみじみと語った。

#11教室における個別相談では、母親は、「この1ヵ月間、A児が自然な感じで母親に寄り添っていることが多くなり、母親もA児が可愛くなってきた」とカウンセラーに話した。

3) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅰ期や第Ⅱ期では、母親がいなくても不安な様子はなく完全な母子分離の状態であった。そして、母親が呼んでもそれに従わず、母親が無理やり連れ戻すパターンであったが、第Ⅲ期では、状況は一変し、A児は母親の側にいるようになり、母子不分離の状態になった(図1)。

#11には、A児は、母親の見える所でひとしきり遊んだ後に、母親の膝に座って寝てしまうことがあった。母親の側にいる安心感をA児は感じているようだ。母親もまた、「A児が可愛くなってきた」と話しているように、A児と母親の間に愛着が形成され始めていることを伺わせた。

第Ⅳ期 母親への愛着が形成され、子どもや保育者との遊びを楽しむことが芽生えた時期

(#12～#15 X+1年2月～3月)

1) 教室でのA児の様子

#12では、保育者が他の子と粘土を転がして遊んでいると、A児がその遊びに入ってきて保育者に粘土を渡し、子ども同士で手渡しすることができた。その後、A児と母親と保育者で追いかけて遊ぶことができたが、母親や保育者に「タッチ」と触られることを喜んで、表情も大変嬉しそうであった。そして、「タッチ」されるのを繰り返して要求した。

#13では、A児が自分から保育者の膝に座りに来て、皿にのっている粘土の団子一つずつ保育者の手にのせた。その皿を他の子が取ろうとするので「これはAちゃんのだよ」と保育者が言うと、A児も「Aちゃんの」とはっきりと言った。また、園庭で遊ぼうと思い、保育者が「ゴー」「行こう」と呼びかけて走るとA児も「ゴー」「行こう」と言って後ろからついてきた。

#14では、園庭の遊び小屋の窓から外の母親に向かって「おー」と手をふった。また、滑り台の上から下にいる保育者と子ども達に「おー」と手をふり、ニコニコしていた。

#15では、的当て遊びをしている子どもに近づき、自分も的に向かってボールを投げていた。保育者が「ゴー」「行こう」と呼びかけて走るとA児も「ゴー」「行こう」と言って、後ろからついていった。

第Ⅳ期では、A児が母親や保育者と喜んで遊ぶ姿が見られるようになった。また、遊びの中では、簡単なコミュニケーションもできるようになり、A児の対人関係が急速に発達していることが示された。

2) 個別相談での母親の様子

#14教室の個別相談では、母親は「A児が楽しく遊んでいる姿を見ると私も幸せな気分になる。発達の遅れがどうしても心配だが、A児なりのペースで少しずつ成長していったらと思うようになった。」と話した。

3) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅳ期では、まだ母親教室にいる母親の近くで遊んでいることが多いものの、保育者が誘うと幼児教室に行くようになった(図1)。しかし、#14では、遊んでいて嫌なことがあると、すぐに母親の側に戻ることが見られ、#15では、母親がいなことに気づくと、「おかあさん」と言って母親を探して不安そうであった。そこで、母親に幼児教室に来て貰うと安心した様子で、行動が活発になった。このような母子分離と不分離を繰り返す状態は1ヵ月続いたが、徐々に幼児教室で遊ぶ時間が長くなっていた。第Ⅳ期では、第Ⅲ期の母子不分離の状態が変化し、再び母子分離して幼児教室で遊ぶ姿が見られるようになった。しかし、第Ⅰ期の母子分離とは異なり、常に母親の存在を確かめて

いる姿が見られた。

A児と母親との関係は、自然ではほえましいものとなってきた。母親が「まてまて」と追いかけるとA児は大変嬉しそうに逃げている。A児は母親との遊びが本当に楽しそうであったが、同時に、母親もまた心から楽しそうな様子であった。母親はA児が愛しくなり、A児は母を慕うようになり、愛着が形成されたことが伺われた。

第Ⅴ期 母親との愛着関係が安定し、保育者とやりとりが出来始める時期

(#16～#18 X+1年3月～4月)

1) 教室でのA児の様子

#16になると幼児教室での遊びに変化が生じ、保育者が芝滑りをしていると、保育者の服を引っ張って滑りたい様子を示すようになった。その後、金魚の水槽のところに行くと、網蓋を持ちながら「よいしょ」と何度も言った。A児が蓋を開けて欲しがっていると感じたため、保育者が開けるとすぐに水遊びが始まった。そして、水中の葉をとっては保育者に「はい」と言って渡した。保育者が「もうやめようね」と言うと、「バイバイ」と言った。また、園庭の遊び小屋の中にA児が入り、「もういいかい」と言うので、「もういいよ」と保育者が言い返すと、嬉しそうに「もういいかい」と何度も繰り返して言い、保育者が窓から顔を見せると「みつかった」と言った。その様子を見ていた、他の子ども達が集まってきて、それらの子も真似をして一緒にやるようになった。

#18では、A児と母親と保育者で粘土遊びをした。母親がままごとををすると、それを見て「ト・ト・ト(トントン)」や「どーど(どうぞ)」と言いながら母親の真似をした。粘土を串でさし、保育者の口もとにもってきて「あーん、あー」と言う。他の子どもや保育者が変わったことをするとそれを何でも真似しようとする姿が見られるようになった。その後、水遊びに参加して服がビショビショになったので、A児は母親の所に戻ろうとしたが、保育者に逆方向にあるリュック(中に着替えが入っている)を取ってこようと促されると、素直に保育者と手をつないで取りに行き、それを持って母親の所へ行った。教室が終わると、A児は母親と手を繋いで帰ろうとしていたので、保育者が「また遊ぼうね」と言うと、A児は保育者に「さよなら」と言って帰っていった。

このように第Ⅴ期では、第Ⅰ期でのフラフラと動き回る状態とは全く異なって、遊びに対して意図的に取り組むようになり、保育者とのコミュニケーションが活発に行われる。

2) 個別相談での母親の様子

#16教室の個別相談で、母親は「最近、精神科医に診てもらったところ『今はまだ自閉症かどうかわから

ず、経過観察が必要』と診断された」と報告した。この時始めて2歳の時に「自閉症の疑い」と診断されたことをカウンセラーに話した。母親は「A児が少しずつ成長していることが自分でも分る」と喜んでいた。

#18教室の個別面談において、A児と母親の自然なコミュニケーションが見られた。A児は、型はめパズルを見ると大変嬉しそうな表情をしてすぐにやり始めた。母親がピースを指して、「これ何?」と聞くとA児は「うさぎ」と答えた。また、カウンセラーに対してA児が足を上げて「あし」と言いながら得意げに見せるので、「すごい」と言って拍手すると得意気にもう一方の足も上げて見せた。その後、母親とA児がかくれんぼをしていたことを話していると、横で聞いていたA児は自分で机の陰にわざと顔を隠した。そこで、カウンセラーが「Aちゃん、みつけた」と言うと大変嬉しそうに何回も繰り返していた。

この時期には、話せる単語は50語くらいになっていた。言葉が増えたこと、その言葉が生きたコミュニケーションに繋がってきていることは素晴らしい成長であることを説明し、現在のA児と母親との関係を基盤に、言葉のやりとりや相互遊びを積極的に行っていくように助言した。母親は、「自分が努力したことでA児が良い方向に発達していることに少し自信ができた」ととても明るい表情で語った。

3) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅴ期の母子分離は、第Ⅳ期と同じく母子分離と不分離を繰り返す状態であったが(図1)、第Ⅳ期で見られたような、母子分離時に母親の存在を気にして不安に思う姿はなくなり、保育者と安心して遊ぶようになった。そして、保育者の真似をしたり言葉のやりとりをするなど、保育者との相互交流が少しできるようになってきた。

また、母親の存在は、ますますA児にとって安心なものとなっている。#17では、A児が母親教室に来て母親を探していると、母親がそれに気づき、A児に手を振って自分の所に来るように手招きした。その母親の姿に気づいたA児が満面の笑みを浮かべて母親の元に走って行くと、母親は手を広げてA児を抱きしめた。A児もまたこれ以上嬉しいことはないといった表情で抱かれていた。その後、A児は母親の膝の上で気持ちよく寝てしまった。

このような状態から、第Ⅴ期では、A児と母親との愛着関係はさらに強固になったことが伺われる。また、母子分離しても安心して遊んでいる状況とを併せて検討すると、母親との愛着関係が内的ワーキングモデルとして作用し、愛着対象が内在化されたことが推測される。

第Ⅵ期 母親との愛着関係を元に、保育者Bへの愛着が形成された時期

(#19～#23 X+1年5月～Ⅵ月)

1) 教室でのA児の様子

#19以降、幼児教室では保育者BがA児に専任で対応していくことになった。#19でのままごと遊びでは、横から保育者Bが「これなあに」と聞いても答えず、「かに」「にんじん」と独り言を言いながら食べ物選びに集中していた。保育者Bが「どうぞ」と言って、A児が持っている茶碗に「にんじん」を入れ、「にんじん、ちょうだい」と自分の茶碗を差し出しても、その茶碗をとってしまうだけで、やりとりの遊びができなかった。また、おもちゃの食べ物を口の中に入れて嚙んでいる状態であった。次に、色水遊びを黙々とする。保育者BがA児のコップに色水を入れることは受け入れられるが、保育者Bが「ちょうだい、お水入れて」と自分のコップを差し出しても、そのコップをとってしまうだけで、やりとりの遊びができない。色水を飲もうとすることもあった。

しかし、シート遊びでは、保育者Bが大きな青いシートの上を飛んだり、シートをゆらすとその真似をした。保育者Bがシートの上に寝ると「おーすみ」、起きると「おはよー」と言い、この遊びを繰り返した。滑り台でも、保育者Bと一緒に滑りたくて「あーあー」と言って要求した。次に、保育者Bが一人で滑ろうとするとA児が背中を押してきた。保育者Bが大げさに「たすけてー」というと「きゃきゃ」と笑った。そこに他の子が3名入ってきて一緒に遊ぶようになるが、A児が他の子の背中を押すと、その子はそれが面白くて笑った。A児もそれを見て互いに笑い合っていた。このように、保育者Bが意図的にA児に関わりを持とうとしても上手くいかないが、A児の遊びに保育者が合わせていくと、A児との交流を行うことができた。

その後、A児は幼児教室の倉庫が気に入る、倉庫の中でひとしきり保育者Bと喜んで遊んだ。保育者Bが「Aちゃん、おやつだよ」と言うと、A児が「バイバイ」と言うので、保育者Bも「バイバイ」と言って出て行こうとすると、「う・う」と呼びとめて抱っこを求めてきた。その後の遊びの時も保育者Bを探して、後をついてくることがあった。リズム体操の時、保育者Bの体からみつき、おんぶを要求した。おんぶの状態では保育者Bがリズム体操をすると「きゃきゃ」と笑った。保育者Bの所へA児が自分から近づいてくるので、「Aちゃん」と声をかけるときちんと目があつた。教室が終わって帰る時に、母親が「ありがとうしなくちゃね」と言うと、A児は保育者Bに深々とおじぎをして帰っていった。

#21には、部屋を出て行くA児を見て、保育者Bが「Aちゃん、お部屋に入ろう」と言うと、素直についてくるようになった。保育者Bがアンパンマンの歌を

歌うと、自らタンバリンと鈴を出してきて叩きながら、体全体でリズムをとる。「おやつだよ、ナイナイね」と言うと、自ら片付けることができる。その後の集団で行うリズム体操の時は、抱っこやおんぶを要求した。

#22で、小山でジェットコースター遊びをした時には、保育者Bが「乗って下さい」と言うと、A児はすぐにそこに乗り、滑り終わって保育者Bが「降りて下さい」と言うと、すぐに降りた。そして、山を登る時は、保育者Bの声に合わせて「ヨイショヨイショ」と言いながら登った。その後、倉庫の中で、粘土遊びをしたが、保育者Bが「僕にちょうだい、アーン」と言ってオバケの口を動かすと、喜んで粘土を口元に持っていき、時々（ちょっとふざけるような雰囲気）オバケの鼻に粘土を持っていくこともあった。集団保育の時に、保育者Bが皆の前でピアノを弾いていると、後ろで洋服を掴んでいる。ピアノが終わった後、保育者Bが「ごめんね」と手を広げると、A児が抱きついてきた。

#23では、A児が5,6人の子どもの中にいる時に、保育者Bが皆にむかって「プールの中で氷（のおもちゃ）を探そうよ」と言うと、A児も一緒についてきた。また、保育者Bが他の子に関わっていても、どこかに行ってしまうので後からついてくる。それ以後、保育者Bを独占できるようになるとどこに行くにも抱っこやおんぶを要求してしがみつこうようになった。

第Ⅵ期で保育者BがA児に専任で対応するようになると、A児の遊びは急速に変化していった。#19では、活発に遊ぶようになったという印象を与えるが、それはA児の興味にあわせて保育者が関わっている場合に限られていた。ままごとのように、他者とのやりとりが求められる遊びでは、自分中心に遊ぶだけで保育者とやりとりをしながら遊ぶことは出来なかった。しかし、回を重ねる内に、A児は急速に保育者Bになついていき、おんぶや抱っこを要求するなど甘える姿が頻繁に見られるようになった。それに平行して、A児と保育者Bとの間に言葉や行動の相互交流が活発になったが、その時にポジティブな情動が伴っていた。これらの様子から、保育者Bへの愛着行動が形成されたことが伺える。そして、#22では、#19で出来なかったやりとり遊びが、オバケを介してしっかりと成立することができたのである。これらの遊びの急速な変化の背景には、A児の表象機能が急速に発達していることが推測される。

2) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅵ期で、保育者BがA児に専任でつくようになると、保育中に母親の元に戻る事がなくなり、完全な母子分離の状態になった（図1）。しかし、#19の保育終了後には、遠くにいる母親に対して「あーあー」と呼び、母親がA児の所に来ると、保育中に行ったシート遊びをやって見せ、母親にもやるように要求してい

た。#20の保育終了後には、保育中に保育者Bとやっ
たかくれんぼを母親にも一緒にやるように要求した。
そこで母親がA児と保育者と一緒にかくれんぼをする
とA児は大はしゃぎをした。午前中の楽しかった遊び
を母親と分かちあいたいと思っているようであった。
ところが、#22では、保育終了後に母親が迎えに来て
も、保育者のおんぶから降りず、「フーンフーン」と
声を出し泣きべそをかいているようであったが、保育
者の背中から降りると、今度は母親に甘えたように抱
きついていった。

第V期は、母親との愛着関係をもとに、対人関係が
保育者Bへと広がっていった時期である。保育者Bと
の間に愛着関係が形成されたことにより、A児は、母
親と保育者Bのどちらを選択すればよいか迷う姿が見
られていた。

第Ⅶ期 母親や保育者Bとの愛着関係を元に、こだわり が軽減し、対人関係が般化していく時期

(#24～#28 X+1年7月～9月)

1) 教室でのA児の様子

入所時には棒を必ず手に持っていたが、半年過ぎる
頃には、遊びに夢中になると棒をどこかに忘れてくる
ようになった。そして、ようやく#26に初めて棒を持
たずに登所してきた。母親は、棒のこだわりがなくな
ったことを大変喜んでいて。幼児教室では、砂場でA児
が数名の子どもと保育者Bとで遊んでいた時、A児は
「バナナ、あか」と言って、バナナの形をした赤いおも
ちゃを保育者Bに渡した。このバナナの渡し合いを
繰り返し楽しんだ。また、保育者Bが「水を持ってこ
よう」というと、「おみず、おみず」と言ってバケツ
を取りに水道のところへ行き、バケツの水をこぼさな
いように上手に砂場まで運んだ。色水遊びでは、保育
者Bが「ちょうだい」と言って待っていると、A児は
「ドード」と言って、色水の入ったカップをくれた。
そして、しばらくこのやりとりを繰り返し楽しんだ。
おやつ時間では、皆でおやつを食べる前に、保育者
Bが「手を洗おう」とA児に言うと、自ら他の子ども
の動きに合わせて、水道の所へ行き順番に並んで手を
洗った。しかし、水道を出しっぱなしで洗い続けている。
保育者Bが「おしまいね」と声をかけると、自分
でも「おしまい」と言って止めることができた。そし
て、自分のタオルを取りに行き、拭いたらまた元の自
分の場所に戻しにいった。

#27では、保育者Bが、集団で遊んでいる探索遊び
にA児も参加するように促すと、走って行き、参加す
ることができた。周りの子どもの行動に合わせて動い
たり、アンパンマンの看板を見て「パンマン」と言う
など声もよく出ていた。閉じている扉の前で、「あか
ないね」とはっきりと言う姿が見られた。泡遊びでは、
他の子どもに「どうぞ」と言って、その子の手に渡し

たり、他の子どもの顔を覗き込む行動も頻繁に見られ
た。また、入所当初は名前を呼ばれても全く気に留め
なかったA児であったが、保育者が同じ名前の子ども
に対して「Aちゃん」と呼ぶと、自分が呼ばれたと思っ
てしきりに気にしている姿が印象的であった。

#28では、他の子どもと遊んでいる保育者Bを、横
でじっと待っていたが、他の保育者がA児を誘うと、
それに応じて多くの子どもと一緒にボディペインティ
ングをしたり、滑り台を滑っていた。他の子どもが変
わった滑り方をする、それを真似して、皆と一緒に
「キャハハ」と笑いながら繰り返し滑っていた。また、
保育者に促されなくても、自ら皆の後をついて遊ぶ姿
も見られた。他の保育者でも、おんぶされると「フン
フン」と鼻歌を歌いだすので、さらに保育者がそれに
合わせてA児を揺らしながら歌うと大変喜んだ。

第Ⅶ期で、A児は幼児教室でますます活発に生き生
きと遊ぶようになった。これは、母親や保育者Bとの
愛着関係が形成されたことにより、A児に社会情緒的
な安定感や安心感が育ってきたことが背景にあると考
えられる。また、大勢の友達やB以外の保育者とも積
極的に相互交流するようになったが、これも母親と保
育者Bとの愛着関係が基盤になって、対人関係が般化
していったことを示していると言える。

2) 個別相談での母親の様子

#27教室の個別相談では、母親は「以前は、どこへ
でもフラフラと行ってしまったが、今では呼べばつい
て来てくれる。また、こちらの話が理解できるよう
になったためか、A児と気持ちが通じることが多くな
ったので安心していられる。」と大変嬉しそうに話した。
また、母親は保育者Bに対して「今まで、どこにい
てもA児の心配が頭から離れず疲れていた。でも、A児
はB先生が大好きになり、私も安心してお任せするこ
うことができました。」と感謝の気持ちを表した。

3) 母子分離と愛着形成の様子

第Ⅶ期は、第Ⅵ期と同様に、完全に母子分離をして
幼児教室で遊んでいた(図1)。#25の保育終了後
には、母親に逢うと嬉しそうに体をバタバタさせた。
しかし、母親が掃除をしなければならなかったの
で、保育者Bと滑り台で遊びながら母親の掃除が終
わるのを待っていた。第Ⅵ期では、母親と保育者B
のどちらを選択するかという葛藤が見られたが、第Ⅶ
期では、どちらの関係も大事にしていく自己コント
ロールができてきたと言えよう。

総合考察

1. 自閉性症状における母子分離と愛着形成の指 標の有用性

A児の1年間の母子分離推移を見ると、第Ⅰ期、第Ⅱ
期は母子分離していたが、第Ⅲ期で突然完全な母子不

離状態となった。その後、第Ⅳ・Ⅴ期では、少しずつ母子分離ができるようになり、最後の第Ⅵ期と第Ⅶ期では再び母子分離状態になったが、この母子分離の1年間の推移は、愛着形成の経過とまさに対応していた。すなわち、第Ⅰ・Ⅱ期では、A児の母親への愛着行動は全く見られず、愛着形成は不全であったが、これは、ちょうどストレンジ・チューション法 (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978) の回避型に類似した状態と考えられる。第Ⅲ期で母子不分離状態になったが、この期になって母親への愛着行動が出現したことから母親が安全基地として機能するようになったと考えられる。第Ⅳ期では、少し母から離れて保育者と遊ぶようになったが、母親の存在が気になり、母子分離の際には不安を示していた。第Ⅴ期では、母子分離の不安が軽減されていくものの、まだ母親の側に戻る行動が見られた。一方で、これらの期は、母子間に情動豊かな相互交流が見られ、母親に対する愛着関係が形成されたことを伺わせる時期であり、分離個体化理論 (Mahler & La Perriere, 1965) における母親からの分離プロセスに重なりあう。第Ⅵ期と第Ⅶ期では、完全な母子分離状態になったが、愛着不形成であった第Ⅰ期や第Ⅱ期とは全く異なるものであった。これらの期になると母親との愛着関係は強固なものになっていたが、この愛着形成が内的ワーキングモデル (Bowlby, 1969) として作用して、愛着対象が内在化されることによって、母子分離を果たしていったと考えられる。

また、親子教室に入所して6ヵ月が経過した第Ⅴ期#16に行った愛着Qソート法では、愛着安定性係数は0.353であった。尾崎 (2003) は、2,3歳児101名の愛着安定性係数を調べた結果、平均値は0.36であったことを報告している。この平均値と比較すると、#16のA児の愛着安定性はほぼ平均的な状態であることが分る。入所直後は、愛着行動が全く見られなかったA児であったが、6ヵ月後には愛着形成が他の子どもと同レベルまでになっていた。さらに、その4ヵ月後の第Ⅶ期#25に行った愛着Qソート法では、愛着安定性係数は0.616であり、#16よりも愛着安定性が高くなっていたが、この値は2,3歳児の愛着安定性の平均よりも高いものであった。この愛着Qソート法の結果は、上記のA児の愛着形成の経過、すなわち第Ⅴ期の「母親との愛着関係が安定し、保育者とやりとりが出来る時期」を経て第Ⅶ期の「母親や保育者Bとの愛着関係を元に、こだわりが軽減し、対人関係が般化していく時期」に至るまでの母親に対する愛着形成が強固になっていく経過を実証するものである。

このように母子分離の状態は愛着形成の状態を反映しており、母子分離と愛着形成の両者のプロセスとその対応状態を調べることで、自閉性症状を持つ幼児の愛着形成の状態を的確に把握することができた。

2. 愛着形成が自閉性症状に及ぼす影響

A児は、2歳時に「自閉症の疑い」と診断された、2歳6ヵ月で親子教室に入所した時にも、社会性・対人関係発達遅れの遅れ、コミュニケーション発達遅れの遅れ、棒を手を持ちつづける執着傾向や手をひらひらさせる常同行動など、自閉症の特徴が一通り観察された。また、母親との関係では、A児が困った時に母親を求めないこと、母親の問いかけにも注意を向けないことなど、母親が安全基地として機能していない状況を伺わせた。

そこで、A児がもつ自閉性症状の生得的特性のために、乳児期より母子間の相互作用が円滑に行われず、その結果として愛着行動が形成されなかったと捉えて、愛着関係の育成を目標に母子支援を行った。親子教室では、健常児、自閉症児に関係なく、乳幼児の発達の基盤は母子間の愛着関係の形成にあると考えて活動を行っているが、その活動方針が教室生全体に行き届いてくると、親子教室は親子をholdingする暖かい「場」と変容していく。そして、その「場」自体が愛着の情動を刺激するようになると考えられる。入所当初は母親を求めなかったA児が、#8以降母親の側にいるようになった背景には、親子教室の「場」が作用していたことが推察される。また一方では、母親への対応が重要である。子育てに自信を失い、無力感を感じている母親に対して、A児が出生以来どのような発達過程を辿ってきたかを確認し、現在の母子関係の状況を把握してもらう作業が必要である。これにより、母親は過去を整理し、これからの自分の方向性を具体的に知ることができる。A児の生得的特性のために母子相互作用が上手くいかなかった可能性があること、母親の責任だけではないことを母親が理解することによって、母親は本来持っていた子どもへの愛おしさを感じるようになったと言える。

第Ⅲ期でA児の母親への愛着行動が芽生え、その後急速に母子間に安定した愛着関係が育まれていった。A児は母親に甘えるようになり、母親はA児を可愛く思うようになった。それと並行して、A児の母親への反応性がよくなり、母親の指示に従って行動することができるようになった。また、話せる単語が急増し、単語レベルの簡単なコミュニケーションが成立することが見られた。これは、母親との間に安定した愛着が形成されたことが、自閉性症状の軽減に作用したことを表していると言える。さらに、幼児教室では、保育者BがA児との愛着関係を育んでいったが、この愛着対象の広がり、A児の社会情緒的発達やコミュニケーション発達を急速に進めることとなった。そして、教室活動が1年を過ぎる頃には、執着傾向や常同行動が見られなくなった。愛着形成の過程において、A児は他者と情動を分かちあう体験をし、他者との間主観的な関係性を発達させていったことが、自閉症状の根幹をなす社会性・対人関係やコミュニケーションの問題の発達へ繋がったと思われる。

このように、1年間の親子教室の経過において、A児

の自閉性症状はかなり軽減していき、教室修了後の3歳6ヵ月時には、自閉症という診断が下されることはなくなった。Levy (1983) は、より早期に治療的介入をすればするほど、自閉症状が不鮮明になるという臨床経験に基づいて、早期の予防的介入により症状の輪郭がぼやけることと診断が曖昧になることには、直接的な関係があると指摘したが、A児の場合も親子教室における愛着関係を育む母子支援を行ったことにより、自閉症状が不鮮明になったと考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*. Vol.1. *Attachment*. New York: The Hogarth Press.
- 河村由紀・尾崎康子 1999 親子教室における3歳児の母子分離に関する研究(2)－母子密着型の事例研究 家庭教育研究所紀要, **21**, 115-122.
- 小林隆児 2000 自閉症の関係障害臨床 ミネルヴァ書房
- Levy, S. 1983 The effect of early intervention on the diagnosis of autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **24**, 155-176.
- Mahler, M., & Perriere, K. 1965 Mother-child interaction during separation-individuation. *Psychoanalytic Quarterly*, **34**, 483-494.
- 尾崎康子・四日市ゆみ子 1999 親子教室における3歳児の母子分離に関する研究(1)－母子分離型の分類についての予備的検討 家庭教育研究所紀要, **21**, 109-114.
- 尾崎康子 2003 愛着と気質が母子分離に及ぼす影響－2,3歳児集団の継続的観察による検討 教育心理学研究, **51**, 96-104.
- Stern, D. N. 1985 *The interpersonal of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York: Basic Books. (小此木啓吾・丸太俊彦監訳 1991 乳幼児の対人世界 理論編・臨床編 岩崎学術出版社)
- 山上雅子 1999 自閉症児の初期発達 ミネルヴァ書房